

故金山正信先生を偲んで

吉田眞澄 (大学法学部教授)



金山正信氏略歴

一九一四年一月二五日生まれ。一九四二年関西大学文学部を卒業。関西大学助教授を経て、四八年同志社大学法学部助教授として入社。五一年法学部教授に就任され、六二年法学部長、六四年図書館長を歴任された。八五年名誉教授。
一九七九年九月二七日永眠 八十二歳

敬愛の念止むことない偉大な先達金山正信先生が永眠された。昭和二十三年以来同志社大学法学部に奉職され、学内では、法学部長、図書館長、体育会長等、また、学会では、比較法学会理事等、数多くの要職を歴任され、その面での功績が大であったことはいうまでもない。著書、論文も、初期の法理学的なものから後半の精緻な解釈論を展開されるものに至るまで、範囲も数量も膨大で、その面での貢献も極めて大きい。中でも、注釈民法(4)の「条件・期限」や注釈民法(8)の「事務管理」は、金山民法学の真骨頂ともいうべきもので、わが国の民法学界にとっても、一際高い記念碑的著作である。その手法の評価はともかく、その手法によるかぎり、今後、先生の著作を越えることは極めて難しいように思われるからである。

その事に關し、生涯忘れ得ぬ思い出がある。私が、まだ大学院生であったとき、金山先生が、「私の手法は古い。吉田君の世代は、もっと新しい手法を用いなさい。そのために、椿(椿寿夫明治大学教授)君や石田(石田喜久夫神戸大学名誉教授)君に来てもらっているんだから、両先生からしっかりと学ぶように」という趣旨の話をされたのである。当時は、その意味が必ずしも十分理解できなかったが、今にして思えば、それは、御自身の手法に対する先生の揺るぎない自信の発露であるとともに、それを知り尽くした者の弱点的告白でもあったろう。その言葉にどう応接すべきであるか、私にとっては、今だに最大かつ最終の学問的課題である。

このように、金山先生は、学内行政の面でも、また、研究活動の面でも、大き

な足跡を残されたが、なによりも特筆されるべきは、先生がたぐい稀な教育者であったことであろう。先生の全力を傾注した講義に感動しなかった学生はいないであろう。また、その講義をきっかけに、法律に興味を持ち、法律の世界にのめり込んでいった者は、私をも含め少なくないであろう。金山ゼミの卒業生の中に研究者や法曹人が多いことは、その証であろう。それとともに、先生のあたたかい人間性が、教育者としての魅力を取りわけ大きなものにしていたことも見逃せない。金山ゼミのOB会である「おのが会」が常に盛会であった最大の理由もそこにある。先生のおられなくなった今、先生の植えられた多くの木々が、その願い通りに成長することを心から祈りたい。

故宮崎郇司先生を偲んで

那須雅吾（大学名誉教授）



宮崎郇司氏略歴

一九一四年三月二日生まれ。一九三九年三月同志社大学を卒業後、同志社中学校教員、大学予科学生主事補、鳥取県立鳥取第二中学校教諭を経て、四八年同志社高等学校に就任。五一年大学経済学部専任講師、五二年同助教授、五六年同教授、六五年名誉教授。一九九七年一月四日永眠 八十三歳

故宮崎郇司先生は昨年（一九九七年）十一月四日、八十三歳の天寿をまっとうし永眠された。謹んでご冥福をお祈りいたします。

宮崎先生は一九三九年に同志社大学英文学科を御卒業後、同志社中学校教諭を振り出しに鳥取第二中学校、同志社高等学校と教鞭をとられ、一九五一年から同志社大学経済学部専任講師に就任。爾来二十八年にわたって同志社大学の英語教育、英米文学研究に専念されている。その功績が認められて、一九六五年には永年勤務者として表彰され、一九七九年には同志社大学から名誉教授の称号を授与されている。

先生との出会いは私が経済学部専任講師に就任した一九六三年四月であるが、それまでは先生が大先輩であること以外のこと何れも存じ上げていなかった。そ

の時以来、先生との付き合いは十数年に及んでいる。同じ経済学部所属ということもあつて、教授会、英語科の会議などで先生とお会いする機会は他の人よりは多かったのは確かであるが、残念なことに年の差もあつてか、それほど親しくお話する機会には恵まれなかった。それでもお会いすると何時も実にこやかに話しかけられたことが今でも懐かしい思い出として私の記憶に残っている。そういう先生のお人柄から考えて、教室での先生は学生たちにとつても非常に温和で、優しい先生であつたに違いない。

先生のご研究は主として英文学、特に十九世紀英国小説であるが、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・エリオット、D・H・ロレンス、ジョージ・オーエルなどと共に多岐にわたっている。先生は一年間英国ケンブリッジ大学で在外研究

に従事しておられるが、ご帰国後は先生の英文学研究もスチュアート・ミルなどを中心とした社会学的な視点から文学作品を解釈するという研究方法へと変化、発展したように記憶している。

同志社大学を定年退職された後、先生は近畿大学へ移られ、悠々自適の生活を過ごされていた。年一回開かれることになつている経済学部OBの先生方と交え、の歓送会などで、時折先生にお会いしたものであるが、先生は非常にお元気で、新しい勤め先の近畿大学のお話など伺つたものである。

ご生前、毎年先生から年賀状を戴いていたが、紙面には常にご自分の新しい年を迎えての思いをしたためておられた。最早その先生もこの世にはおられない。誠に寂しい限りである。

百合の花とラテン語

―高田武四郎先生の想い出

長澤邦彦（大学文学部教授）



高田武四郎氏略歴

一九〇五年九月八日生まれ。一九三二年同志社大学文学部を卒業後、ドイツ・ベルリン大学に留学。三十七年同志社大学文学部講師として入社。四〇年文学部助教授、四六年法経学部教授、五〇年文学部教授、五二年文学部長、六五年ドイツ・ライプツィヒ大学を助教授に就任。七〇年名誉教授。
一九九七年二月三日永眠 九十二歳

高田先生は優雅にして厳格、一言で言えば、そんな先生でした。

私の学生時代の先輩達は、高田先生のことを「怖い先生」「難しい先生」だと言っていました。ところが私が実際にお会いした高田先生は優しい老学者でした。

たしかに学問的には学生に大変厳しかったのですが、私達若い学生にはとても親切で心優しい方でした。例えば黒板の前に立って講義をしていても、板書したラテン語が学生によく見えるように脇によって話されるとか、学生のノートを取る速さを考えながら話されるとか、煩瑣哲学との異名をとる中世スコラ哲学を「アペラールとエロイズ」の恋物語などを交えて興味深く話されるとか、「怖い先生」にしてはなかなか気配りをし工夫しながら講義をされていました。後日大学院生になった時にお聞きしたところでは

先生は、大学院に進む学生と学部四年間で卒業し就職していく学生とがいることを考慮して、常に両者を視野に入れながら講義をするような心がけておられるということでした。「自己点検・自己評価」ということが盛んに言われる今ではそのような気配りも当然のことと思われるかもしれませんが、当時昔気質の老先生がそこまで気を使っておられるということはとても意外でした。

学部卒業の直前に私の父が急病で亡くなった時、先生は帰省中の私に大学院奨学金の面接日を電報で知らせてくれました。その電報は家の事情もあつて大学院進学に迷っていた私にとって、一つの決断をもたらしてくれました。その奨学金のおかげでその後も研究を続けることができたわけです。直接の指導教授ではなかったのですが先生には私の父の死をお知ら

せしませんでした。が、どなたから聞かれたのか、実に適切な時宜を得たご配慮を戴き、今でも想い出しては深く感謝している次第です。

先生はまた人に優しいばかりではなく、花を愛で動物を愛し、自然を愛する心優しいお人柄でした。研究室に庭に咲いた花をかかえて入ってこられて、花瓶に投げ入れ、姿を整えて、ひととき見入った後、パイプをくゆらせながら、おもむろにアルベルツ・マグヌスの一節をラテン語で読み始めるのでした。

生前の先生のラテン語テキストの復元、バリオグラフィのお仕事、近年学界で再評価され、その編集出版が計画されているということを聞き、ひそかに喜んでいる次第です。先生のご冥福を祈ります。

大きな日のごとく——高島春江先生のこと——

北川 汀 (中学校教諭)



高島春江氏略歴

一九〇七年六月二九日生まれ。一九三〇年奈良女子高等師範学校を卒業後、兵庫県立篠山高等女学校教諭、神戸女学院高等女子部教諭を経て、五〇年同志社中学校教諭として入社。七二年定年退職されるまで、二十二年の永きにわたり同校の教育に尽力された。
一九九七年十一月二六日永眠 九十歳

海に沈む大きな夕日よかくのごとあらな
と思ふ人の終りも

春江

春江先生が第一歌集『嵯峨野』の表紙裏に書いてくださった歌である。この歌集は先生が定年退職された年に出版された。当時は誕生日で、定年扱いになったと思うが、普通はその年度の三月まで勤めるという人がほとんどだった。ところが高島先生は、「わたしは最後のわがままを通してもらうわ」と誕生日の六月二十九日ですばつとお辞めになった。そこには、学校の定年時期の扱いに対する痛烈な批判もあったように思うが、そのみごとに身の引き方に私などはかくありたしと思つたものだ。最後の授業の後、生徒たちもつて来たすばらしい花束に、目を輝かせ、体いっぱい感激の表情をなさつていた先生が今も思い浮かぶ。

私は一九五九年中学三年のとき、先生に出会った。担任で、国語担当だった。お年の割に（先生は「おばあちゃん・おばん」とあだ名されていたが、今の私よりお若かった）明朗闊達で、おちゃめないたずら娘のようですらあった。先生にとっては、ご主人を亡くされたばかりの厳しい時期であつたことはその後知つた。先生の授業はその語り口が情熱的で、好き嫌いの明快でももしろかった。特に詩歌の世界は格別だった。私が専攻を国文学に決めたとき、同じクラスの男の子に「おばんみたいになりたいのか」といわれて、はつと思ひ至つた。そうだったかもしれない。家計的に厳しかった私の家庭を思い、奨学金のお世話もしてくださり、卒業後、母校で働くチャンスをつくつてくださった先生だった。同僚として机を並べてからは、仕事の面だけで

なく、女性として家庭と仕事の両立、生きる姿勢、先生の愛した花々や、鳥のこゝと、そして短歌とその師弟愛、先生を取り囲んでいた豊かな世界を教えていただいた。

定年後、アラスカに行かれたお話をもつて礼拝に来られたことがあつた。そのときのオーロラの話の壮大だったこと。

礼拝は十五分も延長、その上お話に感激した生徒が先生に次々に握手を求めて大変なひとだかり、たった数十分の間に初めて出会つた若い人々を虜にしてしまった話術と情熱は驚きだった。生きること全うするとき、その息吹は周りの人々にも清々しい感動を与えるということを教えてもらった。

別れゆく最後の禮拜終りたり朝のチャペルに響く鐘の音(第二歌集『氷雪の海』)

故岡満男先生を偲ぶ

渡辺武達 (大学文学部教授)



岡満男氏略歴

一九二二年一月九日生まれ。一九四九年京都大学文学部を卒業後、四九年毎日新聞社に入社。同大阪本社学芸部長、同京都支局長、同大阪本社論説委員を歴任される。
その後七三年大学文学部教授として、同志社に入社。
一九九七年二月一日永眠 七十五歳

岡先生は、毎日新聞で培った権力批判のジャーナリズム精神、弱いものへのかぎりない優しさと愛をもって、十七年にわたって、同志社大学文学部新聞学専攻でメディアの原点についての教育をしてくださり、今その教え子たちが、日本の各界各層の先端を支えるものとして着実に成長しております。

私は、一九九〇年に先生の後任のかたちで、新島襄先生の同志社大学に奉職させていただきました。同志社大学、とりわけその新聞学専攻は、新島精神を受け継ぎ、創設に尽力された和田洋一先生から城戸又一・鶴見俊輔両先生へとつづく自由な学風をもち、権力におもねない雰囲気な大事にする、日本でもっとも伝統のあるメディア・ジャーナリズム専門の研究・教育機関であります。その特徴は、メディア界の実務を知り、同時にメディ

アによる社会改革の思想を大切にするのです。先生はそのながれのなかで、長年にわたり日本のメディア・新聞学研究を第一線で指導してこられました。

とりわけ先生のお仕事を際立たせているのは、関西・大阪の埋もれたジャーナリズムの発掘、男女の共生・助け合いの立場からの婦人雑誌・言論活動の実証的研究とその正確な位置づけであります。その業績については、昨年、一昨年と私はイギリスとアメリカの大学に日本のメディアについての講演にまいりました。が、いずこにおいても、私が日本の同志社大学から来たことを知ると、プロフェッサー・オカは元気がときかれ、外国においても先生のお名前の高いことを再確認し、大いなる誇りを感じました。

同志社大学の新聞学専攻には、岡先生の意志にそうかたちで、今年度から、新

聞学の博士課程(後期課程)が開設されました。メディアがなければ、実体験を超える世界はだれにも理解できません。そのメディアがまともでなくなれば戦前のような時代にもどる危険性が高まります。私たち新聞学専攻スタッフは、岡先生の目指された、二度と治安維持法時代にもどらない健全なジャーナリズムを維持すべく、その機動力となる人材を養成し社会に送り出していくことによって、先生の意志を継ぎますのでご安心ください。

音楽、とりわけタンゴを愛し、すばらしいお声をときおり披露された先生は奇しくも奥様のお誕生日である十二月十九日に逝かれ、いつまでも貴女と一緒にいるよ」という、最後の配慮までされることによって最愛の奥様に一生分の感謝をまとめてされました。謹んで哀悼の誠を捧げます。

信念の人——岡谷元治先生を偲ぶ

島 一郎 (大学経済学部教授)



岡谷元治氏略歴

一九一〇年二月四日生まれ。一九四〇年同志社大学法学部を卒業後、四十六年同志社に入社。五一年同志社大学短期大学部専任講師、五四年経済学部専任講師、五五年同助教授、六〇年同教授。
一九九七年一月三十一日永眠 八十七歳

去年の大晦日の寒い朝、岡谷元治先生は米寿の春を待たずに卒然と逝去された。かねての強いご遺志のままにご葬儀はなく、ご遺族・友人・教え子たちがこもごもに霊前で想い出を語ってお見送りした。ご遺体の傍らには『資本論』をはじめ、先生が終生敬愛されてきた林要・長谷部文雄・住谷悦治など恩師の諸先生の著訳書が納められたが、そのなかに記された数々の書込みが、ありし日、ひとすじに自らの信念に忠実に生きてこられた先生のお人柄を偲ばせて、永別の悲しみをいっそう募らせた。

もう四十年も前になる私たちの学生時代、教え子との心の触れあいを何より大事にされた先生を慕って、その研究室はいつも議論や人生相談をもちかけるゼミやサークルの学生たちで賑わった。よく「私は地主の出身で、わがままだから」と

おっしゃっていたように、先生はいつも齒に衣を着せずに率直に話され、また「頑固派」の異名にふさわしく、安易に主張を変えようとはされなかった。いい加減なことを言おうものなら「それは君、まさに観念論だよ!」と叱られることもたびたびだったが、厳しい言葉の節々から暖かくやさしい愛情が伝わってきて、不思議にあとはさわやかだった。

こうした師弟の交わりがきっかけで、ご退職後も「岡谷ファミリ」がしばしばお宅を訪れ、それは亡くなる直前まで続いた。そんなとき、先生は杯を傾けながらよく、ファシズムが横行した昭和初年、必死で良心の灯を守ろうとされた恩師の先生方との出会いと感化、反戦運動の実践と検挙、侵略の罪行を前に悶々と過ごした中国での挫折の日々、など若き日の歩みをしみじみ語られた。

戦後母校同志社に迎えられた先生は、このような青春の体験を生き方の原点として、研究や講義を通じて中国への科学的理解の大切さを情熱をこめて語りかけられたばかりか、進んで日中友好運動の先頭に立たれた。それは、まだ国交もなく、人々が目をそむけていたその頃の、未来への貴重なさがけだった。それだけに先生の中国への思いはまた格別で、北京大学に留学された折には、一時永住の希望すら漏らされるほどだったが、その中国に対してさえ先生は信念に忠実だった。すなわち留学半ばで「文化大革命」が起ころや、これにおもねることなく、敢然と帰国されたのである。出迎えた私たちに「正しくないことに妥協すれば、君たちに合わせる顔がないよ」と誇らかに破顔一笑された先生のあの姿が、今もくつきりと私の臉に焼きついている。

奥村皓夫先生を偲んで

山崎 彰 (高等学校長)



奥村皓夫氏略歴

一九二九年九月二〇日生まれ。一九五二年京都大学理学部を卒業後、五二年同志社中学校教諭として入社、五四年同志社高等学校教諭、七七年永年勤務者として表彰を受けられた。
一九九八年一月一日永眠 六十八歳

わたくしと奥村皓夫先生との最初の出会いは、同志社高等学校の採用試験の時でした。人事委員会の一員として面接に当られた先生は、人を圧するような、かっぱくのいい方でした。しかし、眼鏡の奥に大きく輝く柔和な眼差しが、緊張したわたくしの心をほぐしてくれたことをいまでも思いおこします。

就職早々の教職員会議、あるいは教員会議での先生の発言には大変驚かされました。必要な時に、必要なことを、明快にかつ堂々と発言される先生の態度は、新任の未熟なわたくしにとって大きな刺激となりました。先生の会議に臨まれる姿勢を通じて、同志社高等学校の学校運営に関する最高決議機関が教職員会議であり、教育上の諸問題の最高決議機関が教員会議であるということ、そしてこのことがもっている意義とその重要性を実

践的に学ばせていただきました。

また、教育上の問題での先生との議論を通じて、多岐にわたる教育活動のもつ本質的な意義について、そしてまた高等学校の教員としての生き方についても多くを学ばせていただきました。

ところで、クラブ顧問としての先生について特筆すべきことがあります。それは、インターハイで、フェンシング部が団体優勝した時に監督をされたということとです。また、同志社中高オーケストラの基礎づくりをされたということです。

一九九四年、先生は定年を待たずに本校を退職され、財団法人京都府私学振興会の常務理事に就任されました。当時、いろいろな困難に直面していた私学振興会の立て直しに取り組まれるためでした。先生の豊富な経験、たとえば京都私学教職員組合協議会の委員長として、あ

るいは私立中学高等学校協会の役員や京都府私学審議会の委員としての豊富な経験を生かし、京都の私立学校全体の振興に専念されることになったわけです。しかし、振興会の運営がようやく軌道にのりはじめ、これからという時に先生は病を得られ、今年の一月一日に永眠されました。先生にとつても、わたくしたち私学に働く者にとつても大変残念なことでした。先生が同志社に寄せられた思い、私学全体の発展を願われた先生の思いを、わたくし自身の内にしっかりと受け止めていきたいと決意を新たにしています。

最後に、先生の音楽への深い造詣、ギリシア文化やルネサンス文化への強い関心、幅広い読書と知識、これらのことを通じて、豊かな人間形成への願いと憧れを、わたくしに意識させて下さいましたことを心から感謝して筆を擱きます。